令和２年度　学校評価総括表

奈良県立奈良朱雀高等学校（全日制課程）

学校運営方針　（４月）		総合評価
教　育　目　標	○ 人権を尊重する民主的な社会の形成者として、豊かな人間性と創造性を備えた生徒を育成する。 ○ ものづくりとビジネスの実習・演習をとおして、専門的な知識や技術・技能を身に付けた社会に貢献できる生徒を育成する。	B
学 校 運 営 方 針	・ 地域社会・地域産業と連携・協働し、高等学校普通科教育並びに工業科・商業科等に関する実践的な教育を展開し、地域を担う将来のスペシャリストを育成する。 ・ 生徒一人ひとりの成長を支援し、生徒自らが自身の成長を実感できる教育を推進する。	

昨年度の成果と課題	本年度の重点目標	具体的目標
生徒アンケートの授業満足度において一定の成果が得られた。デュアルシステム、商と工の協働的な課題研究についても、試行的ではあるが取組が進んでいる。また、地域との連携についても継続的に実施できた。工学系におけるインターンシップについては一定の成果を収めることができたが、ビジネス系においては実施率に課題が残る。工学系、ビジネス系ともに各種検定・資格試験の合格率が目標に届かない等の課題を残すこととなった。 主体的で意欲的な生徒の育成と、工学系とビジネス系が併設された特色のある学校づくりの推進を図るため、専門教育の活性化をはじめとして、あらゆる教育活動において、全職員が教育目標を共有し、協働的な教育活動をすすめていかなければならない。	(1) 工学系とビジネス系等に関する基礎的基本的な知識や技術・技能を身に付けさせ、社会の様々な変化や多様な課題に対応することのできる力を育成する。	・専門教育の活性化を図るとともに、商工協働型の課題学習の在り方を検討する。 ・インターンシップ・デュアルシステムを推進し、地域社会・地域産業との連携・協働をすすめる。
	(2) 規範意識を高めさせるとともに、社会の一員としての自己の役割について認識させる。	・あいさつ、身だしなみ、清掃、時間厳守などの指導を徹底し、社会性と規範意識の向上を目指し、地域からの信頼を得るとともに、自己の有用性を高めさせる。
	(3) 目的意識を持ち協働的に粘り強く取り組むことができる精神力や体力、協調性を養う。	・部活動の活性化により、達成感、連帯感、協調性を育む。また、身体測定、健康診断、体力テスト等を用いて自己の体の状況を適切に把握させ、体力の重要性を認識させる。
	(4) 安全教育の充実を図るとともに、安心して学校生活を送ることのできる環境の整備に努め、安全衛生管理体制を確立する。	・本耐震工事への対応を生徒の安全性を最優先に考えて行うとともに、あらゆる活動場面において環境の整備を適切に行う。また、生徒の防災、減災意識を高める指導を徹底する。
	(5) 学校の魅力や特色を校外に積極的に発信するとともに、地域の一員としての学校の在り方を創造する。	・学校ホームページをはじめとする広報活動を充実させるとともに、地域行事への参加、ボランティア活動等を積極的に行い、地域の一員としての役割を果たす。
	(6) 教職員の健康管理を意識した働き方改革を推進するため勤務時間等の管理を徹底し、より質の高い教育活動を行う。	・各分掌、学年等が担う業務をあらためて明確にするとともに、適宜個人面談や連絡会等の機会を設けて教職員間の円滑な連携や協働体制を構築する。

教育活動・分掌等	評価項目	具体的方策・評価指標等	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	課題の改善策等	学校関係者評価及び改善方策
教　務	・成績不振生徒の減少を図る。	・各学期成績不振生徒（欠点科目１科目以上）を 10%以下にする。	B	B	B	・成績不振生徒（欠点科目１科目以上）は第１学期 9.3%、第２学期 17.8%であった。うち、第１学期は 87.8%、第２学期は 93.9%の生徒が補充講座、追考査の結果により補正された。	・本年度は４月当初の在宅学習に始まり、分散登校、時差登校、短縮校時と従来とは大きく異なる想定外の一年となった。そういった状況下ではあったが、先生方の創意工夫により、例年と比べても遜色のない学習活動が行えたのではないかと思う。引き続き感染防止対策を取りながら、再び同様の事態が起こった場合にも対応できるよう動画配信等の態勢を整えていくとともに、学習活動に極力影響が及ばない方策を学校全体として検討していかなければならない。 ・令和４年度からの新教育課程の導入に際しては、工業科と商業科を併設する本校の特色を更に打ち出すとともに、魅力ある学校となるような教育課程を編成する。	・専門高校の特色を最大限に生かして、実学教育をより一層推進していく。 ・家庭学習の定着に更に取り組むと同時に、学習室の設置等、校内の自学自習環境を整えていく。
	・家庭学習の充実を図る。	・本年度各学年「まったくやっていない」生徒を 0%に近づける。	B	B		・第１学期考査後家庭学習のアンケート結果は、「毎日やった」「まあまあやった」合わせて 71.2%、「まったくやっていない」5.5%となる。・第２学期考査後家庭学習のアンケート結果は、「毎日やった」「まあまあやった」合わせて 61.1%、「まったくやっていない」9.3%となる。		
	・授業の充実を図る。	・授業アンケート質問事項「総合的に言って、この授業に満足している」〈A そう思う〉・〈B だいたいそう思う〉合わせて 80%を目指す。	A	A		・授業アンケート結果は、質問事項「総合的に言って、この授業に満足している」A そう思う B だいたいそう思う 合わせて第１学期 82.4%、第２学期も 85.1%となる。		
生徒指導	・基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上を図る。	・遅刻防止の指導を徹底する。（遅刻回数を全体で昨年度比 10%の減少を目指す。）	B	B	B	・遅刻は昨年度より学校全体では 20%の増加であるが、突出して遅刻の多いクラスを除いて計算すれば、昨年度とほぼ同数である。	・生徒指導部として、月に５回以上遅刻した生徒を対象に日を設定して一斉に指導しているがその効果は薄い。遅刻指導に至るまでに各クラスでの何らかの有効な取組が必要である。 ・昨年度より靴下の指導の徹底を掲げているが、クラスによっては指導が行き届いていないクラスがある。３年間持ち上がる本校において、最優先の指導項目については、徹底した指導を行う必要がある。 ・毎朝のＳＨＲでの両担任による服装、頭髪のチェックを済ませてから、号令、あいさつという流れを、全クラスで共通して取り組んでもらえるよう要請する。頭髪点検を学年主任に任せっきりのクラスがある。毎日関わっている担任が日々の指導を丁寧に行い、月１回の学年主任の点検で違反者がでないような状況になるよう取り組んでもらう必要がある。	・専門高校としての技術や知識の指導と同時に、将来あらゆる場面で重要となる豊かな人間性の教育を重視してもらいたい。（学校評議員） ・学年職員団の指導力を高めるため、実習助手の学年配置を行う。
		・担任による毎朝の服装点検を行う。	B			・クラスにより取組の差はあるが、概ね実施してもらえている。		
		・あいさつの励行（あいさつ運動を展開する。）	A			・時差登校により、われわれ教員の朝の時間に余裕ができ、多くの先生方に立哨指導を協力していただけた事で、挨拶をする生徒が増えた。		
		・集会等による自転車通学マナー・乗車マナー向上の啓発活動を行う。	A	B		・新型コロナウイルスの影響で集会は実施できなかったが、各クラス朝のＨＲ等の時間を利用しマナー指導を展開した。		
		・毎朝の登校指導、校外巡視による通学マナー向上の啓発活動を行う。	B			・通学マナーについて、地域の方々から、しばしば苦情をいただくことがあった。		
		・交通安全教室等の実施により登下校時の安全確保の取組を実施する。	B			・「交通安全教室」を実施し、安全指導に努めた。		

		・「スマホ・ケータイ安全教室」により情報モラルを身に付けさせる。	B	B		・「スマホ・ケータイ安全教室」を計画していたが、新型コロナウイルスの影響で実施できなかった。	・スマホの利用については、登校したらすぐに貴重品とともに、鍵付きロッカーに入れるように習慣付けたい。	
		・休憩時間等に校内巡視を行い、スマホ使用のルール順守を徹底する。	A			・昼食時に担任が教室で食事指導を実施していることで、校内でのスマホの利用は格段に減少したが、まだまだ、カバンの中に入れていない生徒は多くいる。		
進路指導	・卒業までに就職希望者全員の就職先を決定する。	・就職希望者に対して面接指導や学習指導を強化し、近年多様化する就職試験に対応できる力を身に付けさせる。	A	A	B	・就職希望生徒のうち学校紹介を希望するものは、数名を除いて内定した。（２月４日現在）・奈良労働局主催の就職ガイダンスは中止になったが、先生方のご指導により１次合格率は昨年度並みになった。・求人数はホテル、アパレル関係を中心に減少し、生徒にとって厳しい結果となった。来年度もこの状況は継続する可能性が高いと思われる。	・今年度の就職一次内定率は昨年度並みであったが、来年度は業種によっては求人数の減少、倍率のアップ等、更に状況が厳しくなることが予想される。早期からの取組が重要であるので、ＳＰＩ、一般常識の問題集の活用、進路ガイダンスの実施等により進路に対する意識を高めさせる。	・インターンシップ、デュアルシステムの推進により、よき勤労観を醸成し、実学教育の目指す「地域社会に貢献できる人材」、「地域の活性化に寄与できる人材」の育成を推進して欲しい。（学校評議員） ・地元企業を積極的に紹介していただき、優秀な人材を輩出してもらいたい。（学校評議員） ・進学者への何らかのアフターケアを検討する。
	・インターンシップやデュアルシステムを通して、職業観・勤労観を養う。	・各科、学年と連携し、インターンシップ、デュアルシステムをさらに充実させる。	B	B		・インターンシップはコロナ禍の影響で参加できた生徒は少なかった。来年度は商工会議所との連携もあるので、より多くの生徒が参加できるようにする。デュアルシステムは本年度建築工学科で実施した。来年度は機械工学科で実施予定である。 ・コロナ休業時に３年担当教員が出演・作成した「面接指導」（生徒視聴用）の動画が好評だった。	・インターンシップ、デュアルシステムをさらに充実させるために、学校全体で生徒が参加しやすいように工夫する。 ・１年次より、「進路のしおり」、進路ホームルーム等をとおしてさまざまな進路先があることを理解させ、自らの進路を開拓する力を付けさせる。	
	・キャリア教育を充実させる。	・様々な教育活動を通して好ましいキャリアの形成を計る。	B					
	・専門高校推薦・公募推薦での合格者を昨年度より増加させる。	・進学希望者に対しての講座を充実させて、国公立大学を含めた専門高校推薦・公募推薦に対応できる実力を付けさせる。	B	B		・専門校推薦で大阪教育大学、摂南大学に、公募推薦で大阪体育大学に合格した。また、資格推薦で大阪商業大学、帝塚山大学に合格した。・英語、数学、国語で進学の講座および個人指導を実施した。また、口頭試問の模擬受検練習を理科・数学で実施した。・公務員は技術系で国家公務員（造幣局）、地方公務員（堺市、奈良市）、事務系で地方公務員（御所市）、奈良県警、自衛隊に合格した。特に、技術系は倍率も低く授業で学習した専門科目が出題されるので、早くから目標を定め学習すれば充分合格圏に達することができる。事務系、消防士は倍率が高く、計画的な学習が必須である。	・公務員希望者に対しては、校内ガイダンス等を利用して、試験の概要、実施状況等について知らせる。特に、技術系の公務員については、しっかりとした対策をとる。 ・進学については、安易に早く合格できるところを選ぶのではなく、将来のことをしっかり考えて進路先を選択するように指導する。 ・進学の講座をさらに充実させて、学校推薦型推薦（専門校推薦・公募推薦）での合格者を増やす。 ・専門校推薦、公募推薦、資格推薦での合格を目指すために、検定や資格の取得を積極的に勧める。	
人権教育 （特別支援）	・基本的人権尊重の精神を根本とし、生徒の全人格的な成長を保障するための教育活動の充実に努め、豊かな人権感覚を持った人間の育成を図る。	・生徒の実態や社会の変化に即した人権ＨＲを企画・立案する。	B	B	B	・ＬＨＲのテーマは三年間を見通して定め、それに基づいて各学年の年間計画を立てた。今年度は新型コロナウイルス感染症対策による臨時休校等の措置のため、ＬＨＲの回数や時間を年度当初の計画通りに取ることができず内容も一部変更したが、工夫して臨機応変に対応することに努めた。ただ、その時間的、内容的変更についてＨＲの事前準備の機会をじっくりと設けることが難しくなった現実もあった。事前準備の機会を十分確保することと事後の共有をより十分に行うことが課題としてあげられる。	・人権ＬＨＲについて、各学年の人権教育部員を中心に人権ＬＨＲのテーマに関することについて研修する機会をもつ。また学年ごとの事前打ち合わせと事後の意見交換を充実させていきたい。	・各種奨学金の事務手続き担当の体制整備を行う。 ・計画的な研修を企画する。
		・職員研修、人権啓発集会を実施する。特に職員研修（職員全体向け）を年１回以上行う。	B			・全校生徒向けの校内人権啓発集会は、ちゃんへん．さん（プロパフォーマー）の講演会（主題は「在日外国人差別」で、ねらいは「在日韓国・朝鮮人差別の歴史的背景を学び、社会における今日的な問題点を考え、さらに様々なルーツを持つ人々との共生のあり方について考える」とした。）を開催した。プロのパフォーマーのパフォーマンスを「生で見る」のではなく映像で見るという結果になったが生徒には好評だった（生徒アンケートの結果「よかった」が 86. 3%、肯定的記述コメント多数）。	・奈良県立高等養護学校から講師を招き、発達障害に関する基礎的な知識、技能の向上を図るための校内職員研修を計画したが、新型コロナウイルス感染症対策による措置のため、現在延期している。このように、延期せざるを得なかった校内職員研修を実施したい。 ・高人教・県外教推進委員は職員会議等で活動報告を行い、また研究会での研修の成果を本校の人権教育に生かすように努めていきたい。	
	・特別支援体制の充実と共通理解	・配慮を要する生徒の把握に努め、生徒、保護者との共通理解により支援と指導を充実させる。	B	B		・年度当初からＨＲ担任、学年主任と特別支援コーディネーターとともに生徒の状況把握と職員の共通理解を深めることに努めた。また、適宜特別支援委員会を開催し配慮を要する生徒について対応した。ＨＲ担任をはじめとし、特別支援コーディネーターを中心とした職員の連携の不断の強化が必要である。	・特別な支援や配慮を要する生徒、また担任として職員全体に知っておいてほしい生徒、さらに生徒指導の面で気にかけておいた方がよい生徒などについて共通理解を深めるため、年度初めと学期の始めや終わりに会議や研修を行い、全職員による確認をし、より一層の意思疎通を図る。	

図　書	・読書活動を通して、思春期における豊かな感受性を育み、自己の内面や社会を見つめる機会をもつことによって自己陶冶に努めさせる。	・朝のＭＳＲなどを通じて、図書への関心を増すための読書活動を推進する。（目標アンケート内肯定的評価80％以上）	B	B	B	・時差登校によりＭＳＲの時間の確保ができなかった。 ・図書館からの発信を昇降口の掲示板で行い、希望図書の募集など読書活動を推進した。 ・図書便りのＰＡＮＤＯＲＡをカラー刷りにして教室掲示することで、視覚で本に興味を持たせるきっかけになった。カラーにすることでホームページでも図書便りの中身が分かりやすくなった。 ・耐震工事による図書館の引っ越しに伴い、徹底的に蔵書の点検整理ができたが図書館が利用しにくい状態にあった。 ・ソーシャルディスタンスをとることが必要となったため、授業での図書館利用が難しかった。 （建築工学科の授業で１回利用（衝立の足を作成）） （機械工学科のＨＲで１回利用）	・各学科コースの生徒の進路先に沿った情報提供資料の不足について、各教科と連携して必要な書籍を準備する。 ・現在の蔵書管理システムは、出処不明の手作りデータベースであり、システムエラーに対応できず、常に蔵書データ消滅の危機にさらされている。早急に他校学校図書館同等の保守メンテナンスの整った市販ソフトを導入する必要がある。 ・「わたしのおすすめ本の紹介」を簡単な形で全員に書いてもらい、良いものを選んで、発表する機会をつくりたい。 ・生徒達の目を引く材料として、紙ベースだけでなくデジタルフォトフレーム等を使い、本の紹介に動きがあるとより興味を持たせることができると考えるので検討したい。 ・ＨＲや奈良ＴＩＭＥ、各教科の取組で、本を読みレポートを提出させるなどの課題を検討してもらいたい。	・コロナ禍における図書館利用の工夫を継続し、授業における利用法を検討していく。 ・ＭＳＲの弾力的な運用において、関係分掌と連携し、より効果的な取組にする。
		・図書館利用の授業を推進し、読書習慣の定着に努める。（目標図書館利用授業回数延べ１０回以上）	B	B				
特別活動	・生徒会活動、各種委員会の活性化を進める。	・生徒会役員がリーダーとして自主的･自発的に学校活性化への取り組むための意識向上に努める。	B	B	B	・新型コロナウイルス感染拡大の影響ですべての活動が影響を受け、多くの行事が開催できなくなった。そのことにより、生徒会活動及び委員会活動も活発な動きはとれなかった。そのような中でも、朱雀祭（文化祭と体育大会）を開催できたことは良かった。生徒会や他委員会が協力し合い、工夫を凝らし、開催したことは今後の生徒会にも受け継がれていき、さらに後輩達が発展させ、学校の活性化へとつながっていくであろうと考える。朱雀祭の開催時期を遅らせたことや、感染状況の様子を見ながらの方針決定を行ったことで、担任の先生方のＨＲ運営に非常に負担をかけてしまった。しかし、生徒達は一生懸命、協力し合い作品の完成に尽力してくれたことは良かった。 ・年度当初の自宅学習期間により、部活動ができない状態が２ヶ月以上続き、またほとんどの試合、発表会等が中止や代替試合となった中でも、生徒達はモチベーションを保って熱心に活動してくれた。１年生の部活動紹介は、冊子配布のみ、見学も分散して行ったので、例年の４月の活気は見られなかった。６月当初の部活動参加数は、加入率は目標値を達成したが、その後の退部者は若干多い現状である。加入生徒の意識向上のための部活動生徒集会も実施できておらず、ここにも影響も出ているように思う。	・次年度の活動については、今年度より他分掌との協力体制を作り、全職員が連携し、また活動全体のイメージを共有できるよう、検討、決定事項を早めに連絡できるようにしたい。特に各ＨＲ担任の先生方が活動しやすくなるよう、要項、冊子等を工夫して配布したい。 ・部活動については、感染症対策をたてながら部活動紹介や配布冊子の中身が有効に新入生に伝わるよう計画、作成に努めるとともに、部活動生徒の活動を効果的にＰＲすることで、生徒達が意気に感じながら活動に取り組める雰囲気作りを心がけていきたい。また、今年度一度も開催できなかった部活動生徒集会などの取組も再開できるようにしたい。 ・今年度の生徒会予算については、新型コロナウイルス感染拡大の影響で来年度への繰越金が多くなる見込みである。今後の予算設定についても、新たな形を考えながら、来年度の予算を作っていきたい。 ・今年度の元気の出しにくい雰囲気を、生徒会の次年度の目標、「Ｌｅｔ‘ｓ　挑戦」のもと、今年度の経験を元に、チャレンジ精神をもって、生徒会行事の運営を進めていきたい。	・学校行事は、教育効果の高い活動であるので、多くの行事において規模が縮小されたものの、工夫が加えられて実施いただけたのは非常に有り難かった。（保護者） ・コロナ禍の収束が見えづらい状況であるので、各種の行事について引き続き工夫を加えながら新たな形態を創造していく。
		・各行事、活動において各種委員会と生徒会が連動して取り組む。	B					
	・部活動の活性化を進める。	・部活動への加入率の維持および向上を目指す。（男子 70%、女子 60%）	B	B				
		・部活動活性化のための、集会等での働きかけ、情報発信に努める。	B					
保健体育	・生徒の健康保持増進を高めるため基本的生活習慣を整え、運動習慣の構築を促す。	・健康調査票等の集約を周知し早期に共通理解を得る。	C	B	C	・感染症、新型コロナウイルス COVID-19 によって身体測定、スポーツテスト、内科検診、心電図検診が予定どおりに実施できず、年度当初は生徒の健康状態の把握に困難さがあった。 ・食事や栄養状態等についても、生徒の様子そのものを観察するほかなかった。 ・保健担当者の努力により、時差登校や短縮授業等の合間に年度末にかけて各健診、検査を行うことができた。	・体育施設の感染症対策においても知識と理解が不十分であり、不適切な表現ではあるが、当初は「その場しのぎ」に追われた。その後、多くの協力体制によって校内の消毒作業等が適切に行え、感染を予防し、その成果は継続されている。	・校内の消毒作業等感染予防策については継続して行っていく。 ・体力増進についてより一層取組を進めていく。
		・食育に関するアンケート調査を実施する。	C					
		・スポーツテストによって運動習慣のアンケート調査を実施する。	A					
	・クラブ加入率を上げ、基礎体力の向上を図る。	・男子 55%、女子 30%の運動部加入を目指す。・運動に関心をもたせることにより運動習慣を構築させる。体力テストにおいて前年学年別平均点より３ポイントの向上を目指す。	C	C		・生徒の健康状態を把握ができない間には、積極的なクラブ活動参加を促す取組ができなかった。さらに多くの大会が中止となり目標や意欲を失った生徒も少なくないことから、継承しようとする生徒も減少傾向となっている。	・生徒の多くが 1 日の運動時間が体育の授業のみとなっており、感染症対策おいても体力向上、免疫力を高めるために運動習慣とともに運動量を増加させなければならないと考える。 次年度に向けても同様ではあるが、第一に生徒の健康の増進、そして安全な活動場所の確保であり、早期の復旧を願う。	
	・健康調査等の取組を計画的、継続的に行う。	・治療勧告書を適切に取り扱い、家庭との連携を密にし、理解と協力を図る。寛解、治癒の報告数を高める。・感染症予防に努める。	B	B		・感染症予防においては、機械科の協力を得て消毒噴霧器の設置、消毒ポイントの増加、業間においての手洗いとうがいの励行をしている。	・教室、体育施設等の換気が常に心がけられるようになっている。 ・食事の時間における感染対策においては、多くの教員が教室に出向き努力をしている。しばらくは次年度も継続されるとよい取組である。	

環境整備 (防災管理・安全教育)	・環境美化の啓発	・学習環境の向上をすすめる。(机・椅子の整備を適宜行う。) ・ゴミの分別・減量をすすめる。(生徒に対する呼びかけを適宜行う。) ・清掃用具の整備を迅速かつ適切に行う。	A B B	B	B	・耐震工事によるクラス教室の変更など、慣れない環境の中、美化活動に対して教職員・生徒全員の協力の下、実施することができた。教室の生活環境(換気)など各人が高い意識をもって対応していた。また、ペットボトルは各人で処理するようになったが、若干の校内での廃棄がみられた。	・耐震工事に加えて、新型コロナウイルス感染拡大により、学校活動において様々な制約を受け、過去の積み重ねが全く役に立たず、新しい工夫を迫られる１年であった。種々の活動の中で職員に無理なお願いをすることもあったが、協力を得ることができ、無事に目的を達することができた。今後も協力を得ながら、目的に到達できる様に工夫を続けたい。	・生徒の活動について、感染症対策を講じながら工夫を加えていく。 ・大掃除の計画的な実施について立案する。
		・植栽活動を行い、環境向上を目指す。 ・「花いっぱい運動」を実施する。	B B	B		・例年とは異なり、「花いっぱい運動」などの植栽活動は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、美化委員全員の活動を行う事が困難となり、一部の生徒の協力により行った。	・植栽活動は、自主性、団結力、協調性、環境意識などを養う契機となる重要な機会である。感染症の影響を受けない、新しい活動方法を考えたい。	
	・防災、安全教育の充実	・教室掲示や避難訓練による避難経路の意識付けを行う。 ・防災 HR の実施し、防災意識の向上を目指す。	A B	A		・避難訓練は、新型コロナウイルスの感染防止対策として、ビジネス系、工業系の実施日を別の日に設定し、学年ごとに集合場所を変えるなどして実施した。 ・１月に各学年防災ＨＲを実施した。	・防災・安全教育は、非常事態時に適切な行動を行い、命を守る重要な判断力を身に付ける効果がある。日常生活において発生する可能性のある様々な危険を予測、回避を可能とする意識付けを育む方法を考えたい。	
総　務	・広報活動の展開	・緊急事態に即応できる連絡体制の充実を図る。(ホームページとメールを活用した生徒･保護者連絡システムを広げる。)	A	A	B	・G Suite for Education を初めて利用し、クラスルーム、ホームページと一斉メールを工夫し、生徒、保護者との連絡体制を強化した。コロナ禍での緊急連絡や、教科の課題等の生徒への連絡、展開に役立った。	・今年度は、コロナ禍の影響で、機会あるごとに緊急メールで保護者に連絡する機会が多かった。アドレス登録者をこれからさらに増加させ、今後も不測の事態に備えるとともにシステムを充実させていきたい。	・引き続き、同窓会、育友会との連携を深め、円滑な運営を目指す。 ・中学生に対する本校のＰＲを進めるにあたり、生徒による活動を取り入れるなどの効果的な広報活動を検討していく。
		・学校と育友会の協力体制の充実を図る。(育友会本部役員・クラス役員の意欲的な活動のサポートを継続させる。)	B	B		・育友会本部役員の教育活動への協力は、多くのＰＴＡ、学校行事が中止になるなか、限られた条件の中でも熱心で意欲的であった。	・育友会行事についても相次いで中止となり、意欲的な本部役員の活動の場が失われ士気の面でも心配であったが、今後も可能な範囲で学校行事の広報活動などを継続していきたい。	
		・１００周年記念事業に向けての準備を推進する。(同窓会との連携を深める。)	B	B		・１００周年記念事業に向けて、各委員会で同窓会への連絡や、方針の確認、作業計画の打合せなど、コロナ禍の限られた条件で努力していただいた。	・１００周年記念事業の成功に向けて、同窓会との連携、各委員会間の連絡調整等を適切に行い、円滑な事業運営となるよう取り組んでいきたい。	
		・学校への関心が高まる広報活動を推進する。(ホームページの内容充実のための啓発研修を深め､内容充実に努める。)	B	B		・本年度から、奈良朱雀高等学校に加え、奈良商工高等学校の内容紹介や、広報に力を入れており、特に秋のオープンスクールにおいて、申込みや質問にも初めてホームページと G Suite for Education を利用して、これからの運用の道を開いた。	・今後もホームページの充実に力を入れ、広報活動を充実させたい。オープンスクールの企画、運営の担当として、参加者受付、質問受付を初めてホームページで行なったが、さらに工夫を加えて活用していきたい。	
機械工学科	・学科の特色や魅力の発信と活性化	・学科のホームページを積極的に更新する。　　２回以上/年	A	A	A	・足踏み式消毒スタンドの製作や寄贈活動、ならびにデュアルシステムでの動画制作等でホームページに２０回以上掲載でき、本校の教育活動の一端を紹介できた。また、来年度の教育活動につながる足がかりもできた。 ・奈良県立教育研究所や奈良市はぐくみセンターに、課題研究や機械研究部の作品展示をして頂くことで、機械工学科の取組を紹介できた。 ・３年生の旋盤実習では、伝統技能を活かして製作した刃物を用い、実際に鉄が削れた感動や満足感が生徒達のレポートに多数表現され、ねらいとする伝統技能、熟練技能の大切さを伝えられたと考える。 ・旋盤技能では、コマの製作に関連して、技能伝承や創造することの大切さがマスコミに取り上げられ、在校生の意識向上や社会へ広報の強化ができた。	・学科ホームページ更新の年間計画を立てる。 ・アップする画像の撮影計画を立てる。 ・撮影時間も考慮し効果的に撮影する。 ・引き続き、課題研究で製作した作品を、県教育研究所、奈良市はぐくみセンターと都跡公民館に展示させて頂きたい。 ・生徒達のまなび（活動）の様子が分かるパネル１枚を、学年ごとに掲示する。 ・今年度中に、連携できる企業を探して依頼し、年間のデュアルシステム計画を立てる。 ・科内で蓄えられている動画教材を早期に集約し、それをたたき台として、担当教科ごとに５分程度の動画を８月末までに２本を目標に試作し、並行して研修を行いたい。	・足踏み式消毒スタンドの寄贈に大変感謝している。卒業生が来校して寄贈してくれたことが嬉しかった。引き続きいろんな形で地域貢献を続けて欲しい。(寄贈先近隣中学校)
		・地域において、製作物やパネルの展示をする。　２回以上/年	A					
		・取組の様子を、校内でも積極的に啓発する。　　２回以上/年	A					
	・地域社会との連携教育推進	・デュアルシステムを積極的に推進する。　２社以上/年	A	A				
	・動画教材の開発	・各科目における基礎基本や要点を精選し、効果的な動画教材を試作する。　　２本以上/年	B	B				
建築工学科	・伝統技術・先端技術・起業家育成の３つのコンセプトから取組を行う。	・コンセプトの取組などから本校本学科で学んでよかったと答える生徒を育てる。　　75%以上	B	B	B	・昨年２月下旬から、新型コロナウイルス感染予防対策の為、多くの取組を見直さなければならなくなり、予定していたものが１学期はほとんど行えず、２学期に関してもおよそ半分しか行えなかった。そのような状況にあっても、主要コンセプトである起業家育成に繋げる取組としてデュアルシステムを導入し、企業との連携を取りながら、1 年間をとおして取り組んだ。 ・マスコミに掲載される機会は５回以上となり良かった。 ・３年生の卒業アンケート「本校本学科で学んで良かったか？」 ⇒「思う」31/36 で 86.1%、「どちらともいえない」4/36 で 11.1%、「思わない」1/36 で 2.8%の結果となった。	・コロナ禍が続く中においても、企業や大学、専門学校などと連携を取りながら、伝統技術の継承や先端技術の習得を目指し、起業家育成のコンセプトを踏まえた「生徒達が本校本学科で学べて良かった」と思わせる取組を多くの先生方の意見を参考しながら進めていきたい。	
		・その取組がマスコミに掲載されるようにする。　　５回以上/年	B	B				

情報工学科	・資格取得をとおした学びの充実として、多くの生徒に各種技能検定等の国家資格を取得させる。	・多くの生徒が国家資格を取得できるように指導する。２年生の取得者35%以上	C	B	B	・２年生の国家資格取得者は約18%で目標は達成できていない。今年度内に国家資格を取得したいと考えている生徒も多く、３年生になっても国家資格取得に挑戦すると思われる。	・多くの生徒が、自ら国家資格取得に挑戦するようになってきた。今後は、学校外から多様な人材を活用しながら、生徒１人ひとりの力を伸ばし、各個人の目標を実現していきたい。	・タブレットを導入することにより、活用法について研修を重ね、授業のみならず新たな取組を創造していく。
		・各種技能士への習得意欲を高めることで、技能検定試験受験者の増加を図る。能士合格者１０人以上／年	B			・技能士合格者７人で目標の１０人には届かなかった。今年度の前期は、取り組んでいた技能検定試験が行われなかった。		
	・学校の魅力や特色を発信する活動をする。	・県内の小中学校または、市町村教育委員会の要望を聞き、連携しながらロボットプログラミング教室等を実施することで、情報工学科の魅力や特色を説明する。　２回以上／年	A	B		・コロナ禍の中であるが、理解を得てロボットプログラミング教室を工夫しながら２回実施できた。	・情報工学科の魅力や特色を発信する活動として、今後もロボットプログラミング教室を充実させていきたい。 ・今後は、県内の小中学校に行く機会を作っていきたい。	
		・奈良県職業能力開発協会や県内企業等から発表の機会を与えられたら、積極的に参加し、情報工学科の魅力や特色を伝える。２回以上／年	B			奈良県職業能力開発協会や県内企業等から、発表の機会を与えられていたが、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け中止になった。		
商業科	・全商協会主催検定合格率の向上	・基礎、基本の定着と授業法の工夫及び授業改善に努めるとともに、その成果として全商検定上位合格率の向上を目指す。 全商簿記検定１級　平均合格率 30% 全商情報処理検定１級 （ビジネス情報）平均合格率 30% 全商情報処理検定１級 (ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ)　平均合格率 30%	B C B	B	B	・各科目とも、学習環境の充実、課題提出や授業内容の工夫、長期休業中、放課後等の補習指導に重点を置いた。 ・今年度の全商検定１級合格者数は延べ８４人で前年比 10%減少。簿記検定１級会計は 17%、原価計算は 14%、情報処理検定１級ビジネス情報部門は 11%、情報プログラミング゛部門は 26%であった。１級検定の問題レベルが年々上昇しているが、目標数値に近づけるよう精進したい。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、各種競技会が全国大会、県大会ともに中止になり、参加することができなかった。この大会に向けて活動していた部活動もあり、大変残念なことになった。しかし、活動してきた内容を検定取得等にも活かすこともできた。来年度は、各種競技大会に参加し、全国大会に出場できるように努力を重ねていきたい。	・年々全商検定１級のレベルが上昇している。出題形式もしっかりとした知識と理解が求められる形式になっている。検定合格率を向上させるためには、生徒の理解力を向上させることが一つの要因になる。そのためには、教員の情報交換がより一層必要になる。準備室や実習教室を整理整頓し、スペースを確保して、人が集まり、自然と会話できる空間を作り、３年間を見通した話し合いの機会を設けたい。教員の共通理解を深め、一貫性のある指導を行うことで、生徒に多くのものを還元していきたい。また、家庭学習については、課題を与えるだけではなく、アプリや通信講座を活用することで、知識のみならず意識を向上させることで、良い学習姿勢へと導き、そこから、現在受験することができていない検定科目も受験可能とするなどし、生徒の可能性を広げていきたい。	・専門校推薦への取組を強化していく。
	・全商協会主催各種競技会への意欲的な参加	・日頃の授業の取組や各クラブ活動を通じて、各種競技会へ意欲的な参加を促す。	B	B				
第１学年	・基本的生活習慣の確立	・挨拶を励行する。	B	B	B	・基本的生活習慣の確立については、高校生活が２ヶ月遅れてスタートしたことにより、挨拶、言葉遣い、校内での言動、規範意識など、入学当時は不十分な生徒が多くいたが、両担任の粘り強い指導や家庭との連携、昼食時の見守りが生徒と向き合うよい機会となり、良好な関係が築けたことで指導が入りやすくなった。授業開始時の号令については教員間で意識の違いがあり、生徒にとっては「やらされている」意識が芽生え、授業とのけじめという目的から離れてしまっている。	・学年集会等を利用し、学年全体としての方針、方向性を示す。 ・挨拶や言葉遣い、礼儀などの指導は、進路の実現等の将来を見据えた粘り強い指導を継続していく。 ・耐震工事が終了するタイミングで遅刻、入室対応の確認を始めとした生活面での基本ルールを確認し、統一した指導を行う。 ・携帯電話の取り扱いについて、教員側の意識改革をし、統一した指導が徹底できるよう取り組む。	
		・コミュニケーション能力を育成する。	B					
		・休憩時間と授業時間とのけじめをつける。	B					
		・欠席･遅刻･早退をさせない雰囲気づくりを行う。	A					
	・基礎学力の向上	・成績不振科目を出さない指導体制を確立する。	B	B		・基礎学力の向上と習得については、例年以上に、学習習慣を身に付けさせることに時間を費やした。特に家庭学習の習慣が身に付いていないため、課題の未提出などが目立った。成績不振生徒にその傾向が顕著であり、両担任の粘り強い働きかけや教科担当者との連携により少しずつ学習に意識が向きつつある。生徒にメモをとらせる習慣を身に付けさせるためビジネス科４クラスで、「フォーサイト手帳」を購入し、メモ帳を活用したＰＤＣＡサイクルの確立を目指したが、目立った効果は無かった。来年度に向けて、週明けと週末、定期考査などで、生活や学習の振り返り行う機会を作っていきたい。	・低学力の生徒が多数いるため、学習方法を具体的に順序立ててアドバイスし、苦手な科目、わからない部分を生徒と共に乗り越え、生徒に対して十分関わることができたと言える粘り強い指導を繰り返す。 ・生徒に関する情報交換をより一層深め、担任と教科担当者が協調して生徒の指導にあたる。 ・メモをとらせる環境を整備し、習慣化を目指す。 具体的には、 ⅰ　毎朝、手帳を机上に出させ、その日の予定を書き込む。 ⅱ　金曜日の終わりの SHR で一週間の振り返りを行う。 ⅲ　月曜日の朝の SHR で一週間のテーマや目標を掲げる。 ⅳ　定期テストの目標設定・学習時間の記録・振り返りを行う。 ⅴ　付属資料を活用していく。 ・ＭＳＲが再開したら弾力的な運用を行い、検定の取得や進路の実現に向けた取組に充てていきたい。	
		・担任と教科担当との連携を密にし、授業時の生徒の実態を共有する。	B					
		・生徒にメモをとる習慣を身に付けさせ、学習のＰＤＣＡサイクルを確立させる。	B					
	・専門科目に対する理解と取組	・実技科目、専門科目の理解と検定取得への雰囲気づくりを行う。	A			・専門科目に対する理解と取組については、工学系クラスは、各科で熱心で粘り強く統一した取組が行われたため高い意欲を持たせることができた。ビジネス科においても、検定前に朝のＳＨＲを利用して小テストを実施するなどしたことで、ビジネス科の生徒も意欲が高まり、落ち着いた雰囲気で学校生活が始められたことも成果として挙げられる。		

	・統一した指導の徹底	・両担任を中心とした学年としての指導体制を確立する。	A	B		・統一した指導の徹底については、学校として、学年としての全体指導ができなかったことが何よりも大きく影響し、各クラス担任に負担をかけてしまった。	・学年集会等で全体としての指導方針を示し、学校のルールに従って指導をしている担任が負担とならないよう、フォローアップ体制を整える。 ・G Suite for Education をより一層活用し、生活習慣の維持や学習の支援に役立てる。 ・落ち着いた雰囲気で学校生活が始められるよう、MSR の早期の復活を望む。 ・保護者との関係をより一層深め、家庭と連携して生徒を成長させる。 ・学期に一度程度、気軽に話せる雰囲気の中で情報交換会を行い、学年の生徒の情報を共有する。	
		・ＭＳＲの雰囲気づくりに努め、読書習慣を身に付けさせる。	―					
		・１分間スピーチを実施し、プレゼン能力を高める。	C			・１分間スピーチは、生徒の性格等を考えると実施が難しい部分もある。		
		・家庭との連携を密にし、学校での指導に理解を求める。	A			・保護者との連携については、どのクラスもこまめに保護者と連絡をとり、生徒の情報を共有し、共に育てていこうとする姿勢を示すことができた。		
		・学年集団が日頃からコミュニケーションをとり、生徒に関する情報を共有する。	B			・教員間のコミュニケーションは、早く耐震工事が終わり、職員室が元に戻ることで解決できると思う。		
第２学年	・基本的生活習慣の確立	・挨拶を励行する。	B	B	B	・入学時から、挨拶については比較的優秀な学年であったが、最近の状況はあまり芳しくない。相手より先に大きな声で挨拶をする習慣を在学中に身に付けさせたい。まず教員サイドが手本を示すべきである。	・挨拶を気持ちよく交わすことが良好な人間関係を築く上で大切であることを社会に出る前に強く意識させる。そのためにも教員自らが模範となるべきである。また、遅刻や欠席の数の多さは基本的な生活習慣の欠如、特にスマホ等に関連した夜更かしを改善させていく必要がある。	
		・適切な生活習慣を身に付けさせ、遅刻、欠席、早退を減少させる。	B			・遅刻の常習者はなかなか改善できない。深夜までスマホに依存しているのも大きな原因のひとつである。		
		・保健室への来室数を減少させる。	B			・女子生徒の友人関係の悪化が原因の保健室来室が多かった。		
		・朝食をしっかりととらせる。	B					
	・基礎学力の向上	・授業態度の向上及び成績向上に向けての雰囲気づくりを行う。	B	B		・授業中の居眠り、スマホ使用など、学習に対しての基本的な取り組み姿勢が欠けている生徒が少なくない。 ・注意を重ねても提出物等を出さない生徒もおり、成績不振の大きな原因になっている。進級に関わる危機感をもたせる必要がある。	・授業中の寝る、スマホ、雑談等は本人の自覚や意識の低さもあるが教科担当者の責任でもある。我々教員が魅力ある授業を展開する必要がある。 ・提出物等の不十分さからくる成績不振者にはなお一層の指導が必要である。	
		・ノート、課題、レポート等の提出に対する指導を徹底する。	B					
		・実技科目への取組の向上を目指す。	A					
	・進路実現に向けての取組	・進路指導部や各教科、関係機関との連携を深める。	B	B		・卒業後の進路選択に向け、真剣に自己と向き合っている生徒も多数いる。逆に全く考えていない深刻な生徒も少なくない。 ・ＭＳＲが行われず進路対策が遅れている現状がある。コロナ禍の影響を受けることが予想されるだけに、早めの準備が必要である。	・就職試験に向けての学習時間を確保し、徹底的に面接練習を繰り返す必要がある。コロナ禍の影響で進路状況に不安な要素がある中、各自の実力をしっかりとつけることが重要である。	・コロナ禍の影響を念頭において適切な指導を行っていく。
		・３学期からＭＳＲの弾力的な運用を行い進路選択の意識付けを行う。	―					
		・保護者との連携を円滑に行う。	B					
	・その他	・アルバイトは極力させず、学習、クラブ活動を重視させる。	B	B		・社会の情勢からアルバイトを必要とする生徒が多数いる現状がある。しかし、本分である学習やクラブ活動がおろそかにならないよう、めりはりのついた学校生活を送らせたい。 ・心身両面からさまざまな支援を必要とする生徒が多数いる。全職員の協力と支援をお願いしながら進級、卒業に向け、また生きていく力を身に付けさせたい。	・特別な支援を必要とする生徒が１０名を超える実態がある。また、発達障害の疑いのある生徒も、それ以外にかなりの数になる。以前のような生徒指導上の問題行動は減少してきたが、前記の「生きていく力」を生徒にいかに身に付けさせるかが大きな課題である。	・未実施の修学旅行について、内容を検討し実施を目指す。
		・配慮を要する生徒への指導を職員間の連携を密にし、適切に行う。	B					
		・行事を充実させ、生徒の主体性・積極性を培う。	B					
第３学年	・基本的生活習慣の確立	・素直で明るく、校歌を積極的に歌える学年づくりを行う。	B	B	B	・今年度については、新型コロナウイルスの影響により、校内外のあらゆる教育活動において、制限や変更または中止などで例年とは違った１年となった。その中においても、３年生の生徒達の表情などを見ていると、苦境にめげず明るく前向きに努力して頑張っている生徒が大半で、非常に力強く感じられた。また、各家庭からも、本校の教育活動全般に対する理解が多く得られた。このことが、コロナ禍の状況においても学年教員集団が一丸となって生徒に情熱を注ぎ、粘り強く生徒と係わる姿勢となり、さらには生徒の安心感に繋がり、学習成果の向上や生徒個々の成長の要因となった。 ・基本的生活習慣においては、進路が決定した２学期以降において遅刻が目立ち始め、最終７００回を超えて当初の目標を達成できず、昨年と同様の課題が残った。	・新型コロナウイルスの影響で、職員朝礼での教員間の連携の必要性が非常に高まってくる。耐震工事が終了することで、朝礼時だけに終わらず、放課後等の時間をうまく活用して学年の情報共有と共通理解の必要性を大切にしていく。 ・コロナ禍において、職員が朝の登校指導に時間を割くことができ、生徒とのコミュニケーションを有効に図れたことについては来年度においても実践していきたい。 ・基本的な生活習慣として遅刻の防止策の一環としてクラス独自でルールを設定し、学年独自の遅刻防止ルールの設定も実施する。	
		・挨拶、身だしなみ、掃除の励行をすすめる。	A					
		・起立、礼、着席など、けじめのある学習生活の徹底を行う。	B					
		・時間厳守の指導を徹底する。　（遅刻回数、学年全体５００回以下）	C					

	・基礎学力の定着と専門的な知識や技術・技能の習得を目指した学習指導	・全員卒業を目指す指導体制の構築と欠点解消率の向上を目指す。	A	B		・学習面においては、1，2学期における欠点の解消率が 86.6%と昨年度より約 13.7%向上している。特に、1 年次と比較すると 22.8%も向上して成績不振への取組に対する理解や、学年の一体感が進級や卒業に対する意識の高さにも繋がったと考えられ、成果のひとつであった。	・学習面においては、日頃から各教科との連携を密にとることで生徒の実態把握を図るとともに、考査前には、放課後等の時間を有効に使った個別学力補充を各クラスで実施し、成績不振生徒の減少に努める。	
		・在宅学習による課題の確認と提出物に対する指導を徹底する。	B					
		・家庭学習調査による実態把握をすすめ、適切な指導を行う。	A					
		・授業態度の向上と欠点を取らない雰囲気づくりをすすめる。	B					
	・進路実現に向けての取組	・全員が進路先を決定する指導体制を構築する。	B	B		・進路実現に向けての取組については、あらゆる機会をとおして啓発を行う。コロナ禍による不況で求人数が県内 15%、県外 11.1%減少の中、就職内定率が 84.0%と昨年度と比較して 1%の減少にとどまったことは成果に値する結果と考えたい。ただ、完全に進路が決定していない生徒の対応も進路指導部と連携を図り、進路決定に向け粘り強く指導したい。	・進路選択に関しては、1 年次から就職や進学の方向性をできる限り検討できる時間の確保を行い、その上で、２年次には各生徒の希望に基づき、積極的にインターンシップの実践を行える体制を構築する。	
		・生徒の進路に対する意識を高めるための環境づくりを徹底して行う。	B					
		・ＭＳＲの時間を弾力的に生かし、一般常識問題の演習を実施する。	B					
	・その他	・配慮を要する生徒についての情報共有と共通理解をすすめる。	A	A		・配慮生徒や特別支援生徒の対応においては、各関係機関の連携が図られ、生徒の不利にならない指導体制が構築され、成果が得られたことに感謝している。	・配慮生徒や特別支援生徒への対応に関しては、できる限り普通の学校生活ができる支援体制を、教職員や他の生徒の理解を得ながら構築していかなければならない。 ・生徒の不安の解消に努めるために、特別支援委員会の持ち方やガイドラインの策定に学校をあげて取り組む時期である。	
		・教室整備を徹底して行う。 （ロッカーの使用方法、ゴミの分別、教室清掃等）	A					
		・保護者との密な連携をすすめる。 （特に欠席、遅刻の連絡徹底と進路選択における連携）	A					